



梅若研能会

六月公演

【西王母】梅若万三郎（前島写真店）

令和7年6月21日（土）午後1時始（開場12時）

於 観世能楽堂 Kanze Noh Theater

GINZA SIX, B3F, 6-10-1, Ginza, Chuo-ku, Tokyo

Saturday 21 June 2025 Start 13:00 (door open 12:00)

二十五世観世左近記念 観世能楽堂



東京都中央区銀座6-10-1GINZA SIX 地下3階

TEL 03-6274-6579

- 銀座駅 東京メトロ銀座線・日比谷線・丸の内線 A3出口より徒歩2分
- 東銀座駅 東京メトロ日比谷線・都営浅草線 A1出口より徒歩3分
- 有楽町駅 JR山手線・京浜東北線、東京メトロ有楽町線 銀座出口より徒歩10分

入場料（全席指定）

指定席A 7,000円

指定席B 6,000円

指定席C 4,000円

※学生は各席種 3,000円引き

お問い合わせ・お申し込み

e+（イープラス）<https://eplus.jp/ath/word/69495>

カンフェティ TEL050-3092-0051（平日10:00-17:00）

<http://www.confetti-web.com/umeken>

主催 公益財団法人 梅若研能会

〒151-0066 渋谷区西原1-4-2 TEL 03(3466)3041

〈メールアドレス〉staff@umewakakenohkai.com

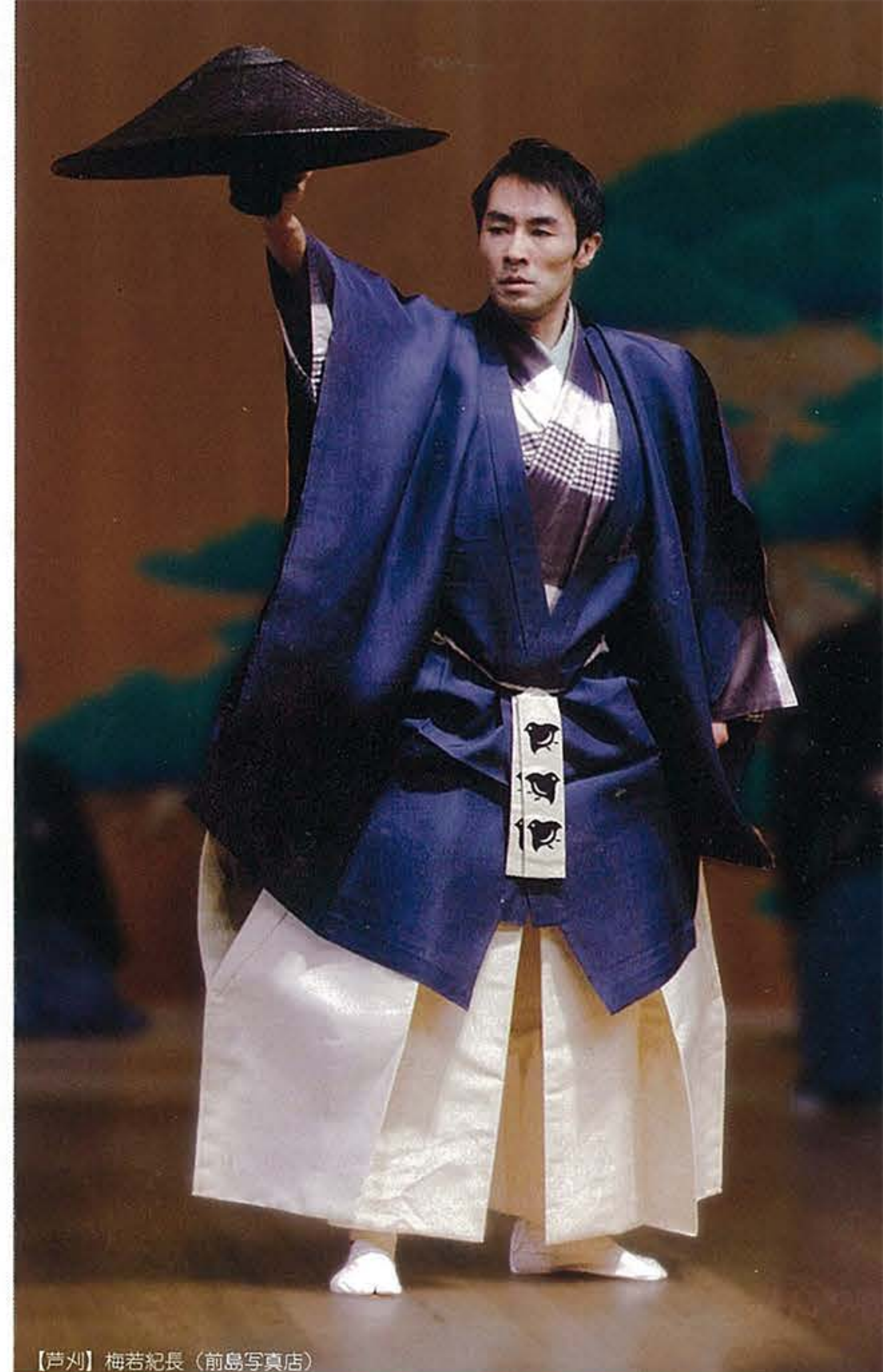
〈ホームページ〉<http://www.umewakakenohkai.com>

YouTube 演目の見どころ解説動画を公開中!

Facebook フェイスブックはじめました! 公演情報更新中!

令和7年梅若研能会 公演開催日のお知らせ

十月橘香会 梅若万佐晴追善公演	10月12日 国立能楽堂	能「敦盛」梅若千音世、能「砵棒之出」梅若紀長、 能「海士 懐中之舞」梅若泰志、 狂言「布施無経」山本東次郎、 仕舞「江口」梅若紀彰、仕舞「融」梅若志長
十二月公演	12月6日 国立能楽堂	能「三輪」八田達弥、能「俊寛」加藤眞悟 狂言「昆布売」善竹十郎



【芦刈】梅若紀長（前島写真店）

能「西王母」「芦刈」みどころ講座

5月18日 13:00 ~ 14:15

於・梅若万三郎家能舞台（渋谷区西原1-4-2）

受講料 1,000円（※研能会入場券購入者は無料）

講師 「西王母」青木 一郎（あおき いちろう）
「芦刈」梅若 志長（うめわか ゆきな）

梅若研能会六月例会

令和七年六月二十一日(土)午後一時始(十二時開場)
於 観世能楽堂

仕舞 胡蝶 中村 政裕
花 筐 伊藤 嘉章
鶉之段 狂 梅若 紀長

前ツレ(侍) 女 青木 健一
後ツレ(侍) 女
前シテ(仙) 女 青木 一郎
後シテ(西王母)

能 西王母



ワキ(王) 野口 能弘
ワキツレ(侍) 臣 野口 琢弘
ワキツレ(侍) 臣 吉田 祐一
ア イ(官) 人 野村万之丞
大鼓 高野 彰
小鼓 古賀 裕己
太鼓 澤田 晃良
笛 小野寺竜一

後見 梅若 雅一
中村 裕

地謡 加野 鉄音 梅若 泰志
梅若 千音世 伊藤 嘉章
古室 知也 加藤 眞悟
遠田 修 梅若 紀長

休憩 十五分

狂言 樋の酒

シテ(太郎冠者) 野村 万蔵

アド(主) 石井 康太
小アド(次郎冠者) 野村眞之介
後見 野村万之丞

(三時二十分頃)

ツレ(左衛門ノ妻) 梅若 紀佳
シテ(日下左衛門) 梅若 志長

能 芦刈



ワキツレ(供) 人 村瀬 提
ワキ(妻ノ従者) 福王 和幸
ワキツレ(供) 人 矢野 昌平
ア イ(里) 人 河野 佑紀
大鼓 佃 良勝
小鼓 曾和伊喜夫
笛 一噌 隆之

後見 梅若 雅一
梅若 紀長

地謡 萩原 郁也 遠田 修
中村 政裕 長谷川晴彦
青木 健一 八田 達弥
古室 知也 梅若 泰志

(終演予定 四時四十五分頃)

能 西王母(せいおうぼ)

古代中国、周の穆王の時代。宮殿で祝賀に興じているところ、手に桃の花の枝を持つ一人の若い女が現れます。その桃は三千年に一度だけ咲くという仙桃で、帝王の威徳により、時機を得て咲いたのだと、この花を帝王に捧げました。伝え聞く西王母の庭園の桃かと女に問いますが、女は答えず「桃花物言わず、幾年か過ぎた」「三千年ごとに実るという桃が、今年は花開く春に巡り逢った」という古歌を引き、帝王の治世を讃えます。女は、西王母の化身であると明かし、後で真の姿となって桃の実を捧げましようとして帝王に約束して天に去ります。管弦の催しを開いて西王母を待っていると、西王母が天女の姿で現れ侍女に持たせていた桃の実を帝王に献上します。喜びの酒宴が始まり、人も花も酔うなかで、西王母は軽やかに舞を舞い、御代を寿ぎながら、春風に乘って、孔雀や鳳凰とともに天へ上がり、消えていきました。

狂言 樋の酒(ひのさけ)

主人が太郎冠者に米蔵、次郎冠者に酒蔵の番をするよう言いつけて出かける。次郎冠者が早速酒蔵の酒を飲み始めるので、太郎冠者はうらやましくて仕方がない。そこで次郎冠者は、酒蔵から米蔵へ樋を渡して酒を流し、太郎冠者にも飲ませることに成功する。すっかり調子に乗った二人は……。

能 芦刈(あしかり)

日下左衛門の妻は、家が没落したため、夫と別れて京都に上り、高貴な家の乳母として奉公する。三年が過ぎて生活も安定してきたことから、左衛門の妻は、夫の消息を知ろうと里帰りします。従者は里人に左衛門の消息を尋ねますが、行方知れずになっていました。しばらく日下の里に留まり、夫を探すことを決意します。

従者は、妻の気持ちを引き立てようと、里人に面白いことはないかと尋ね、当地の浜の市に芦を売りに来る男が面白いという話を聞き出します。浜の市で待っていると、芦刈の男は落魄した身の上を嘆きながらも、芦を刈る風雅さを語ります。その後、芦刈の男は、従者と語り、葦と芦の異名などを紹介した後、有名な和歌を織り込んだ面白い謡を謡いながら、笠づくしの小歌舞を見せます。妻は従者に、芦刈の男に芦を一本持ってきてもらうよう頼みます。芦売りの男は、妻のもとへ芦を持っていきますが、彼女を見て小屋に隠れてしまいます。芦刈の男は左衛門であり、自分の妻だと気づいて、恥ずかしさのあまりに、隠れたのです。妻は、「今は生活も安定したので迎えに来たのです、姿を見せて」と説得します。そして夫婦はお互いの心情を歌に託して交し合います。左衛門は「今は包み隠すことはない」と小屋を出ます。妻との再会を果たした左衛門は烏帽子直垂をまとい、和歌の徳を讃えて、喜びの舞を舞い、夫婦は連れ立って春の都へと向かうのでした。